

せつか もくえ
石戈と木柄



▲石戈の基部

●コレクション・データ

時代 弥生時代中期
調査 唐古・鍵遺跡第93次調査
発見年 2003年
大きさ 石戈：残存長3.6cm、幅3.8cm
木柄：残存長34.3cm、残存幅5.0cm
展示位置 第1室「交流と戦い」

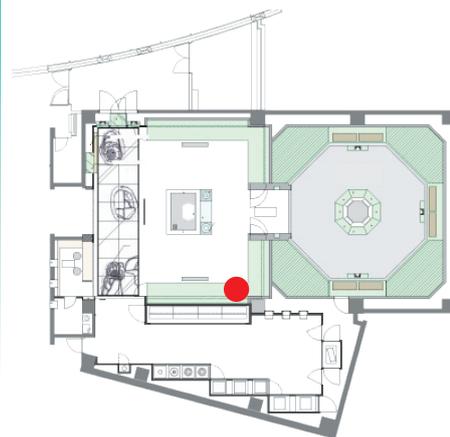
弥生時代の代表的な武器に、「剣」・「矛」・「戈」があります。剣や矛は、馴染みのある言葉ですが、戈はあまり知られていません。戈は、中国・殷代に出現した武器で、長い柄の先端に直交するように装着し振り回して使うもので、主に青銅で製作されました。その後、朝鮮半島での製作を経て、日本には弥生時代前期末にもたらされ中期初頭には製作が開始されました。青銅の戈のほか、模倣品として石製や鉄製のものもあり、戈は日本では武器より祭祀用として使われました。

さて、今回紹介する石戈は、先端が折れ基部のみが木柄内部に残存したものです。サヌカイト製で、打製によって作られており、とても銅戈の模倣品とは言えないものです。一方、木柄はヤブツバキ製で丁寧な作りをしています。一部破損していませんが、中国のような長い柄ではありません。握り部は細く削りだし、先端は逆し字状に少し削りだしています。この部分の少し下に楕円の孔を

穿ち、石戈を装着できるようにしています。注目されるのは、この孔の上端を貫くように径0・6センチの木釘が打ち込まれていることです。この木釘によって、装着された石戈が固定されるように工夫しており、製作者の心憎い技が読み取れます。これによって石戈と木柄の装着角度がほぼ確定でき、75度前後だったと分かります。

もともと中国では、戈と柄の間の角度は、鈍角（上向き）であったのが、日本では上下逆転して戈を装着したため鋭角（下向き）になっています。今回の資料は、打製で実用的なものと同定されますが、その装着角度も日本的であったことは注目できるでしょう。

考古資料の多くは、単品で出土することが多く、本来の使用方法を推定することが困難です。今回の資料は、その意味において、打製石戈の形態を知ることができた貴重な資料になるのです。



ミュージアム上面図と展示位置